

インフラ長寿命化計画（行動計画・個別施設計画）の概要

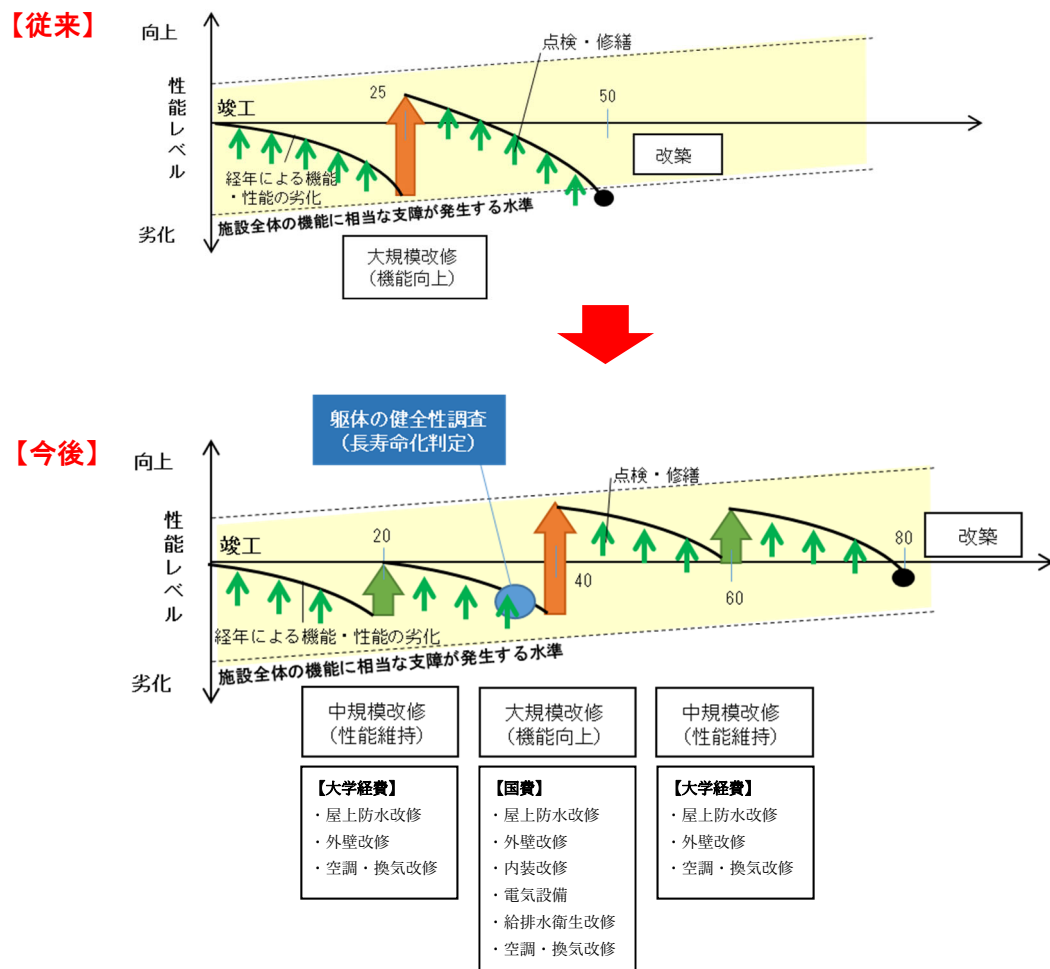
◆目的

- ◇「メンテナンスサイクル」（①定期的な点検・診断、②計画策定、③計画に基づく対策の実施）の構築
- ◇これまでの改築中心から長寿命化への転換による、中長期的な維持管理等に係るトータルコストの縮減
- ◇行動計画・個別施設計画の策定を通じた予算の平準化

◆長寿命化の考え方

施設を最大限有効活用するため、従来は経年25年程度で大規模改修を行い、50年程度で改築するとしていたライフサイクルから、長寿命化のライフサイクルへの転換を図る。具体的には、経年20年程度で中規模改修（性能維持）、40年程度で大規模改修（機能向上）、60年程度で再度中規模改修（性能維持）し、80年程度（80～100年）の耐用年数を目指す。

財源については、中規模改修（性能維持）は大学経費、大規模改修（機能向上）・改築は国費で計画する。



◆計画期間

2023年度から2027年度の5年間（期末は第4期中期目標期間と同じ）

◆対象施設

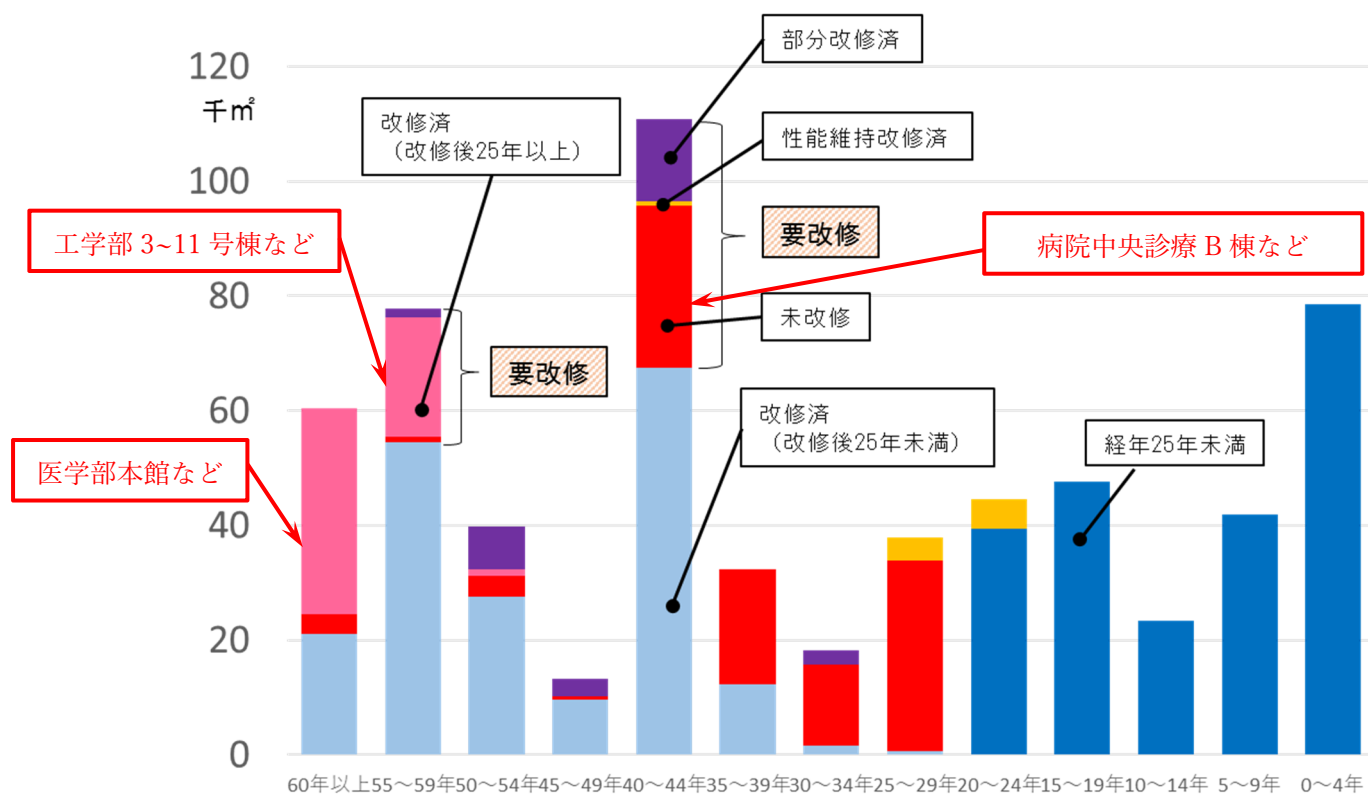
本学が管理を行っている建物、ライフライン等の全てとする。

ただし、病院は別に定める。なお、長寿命化を図る建物は用途、規模等により選別を行い職員宿舎、教育研究施設の附属施設（倉庫、設備棟等）、200㎡以下の建物、外構（道路等）は別途とし、修繕により対応を行う。

◆本学の現状

本学が管理を行っている建物の面積は約62.6万㎡（362棟）である。そのうち建築後25年以上を経過した未改修の建物及び改修後25年以上経過した建物が約19.6万㎡（178棟）で約3割となっている。更に、今後10年の間にその割合は約5割と増加することになり、それらは、経年による老朽化が進んでいるため、安全・安心の確保が懸念となっている。

◇経年別保有面積



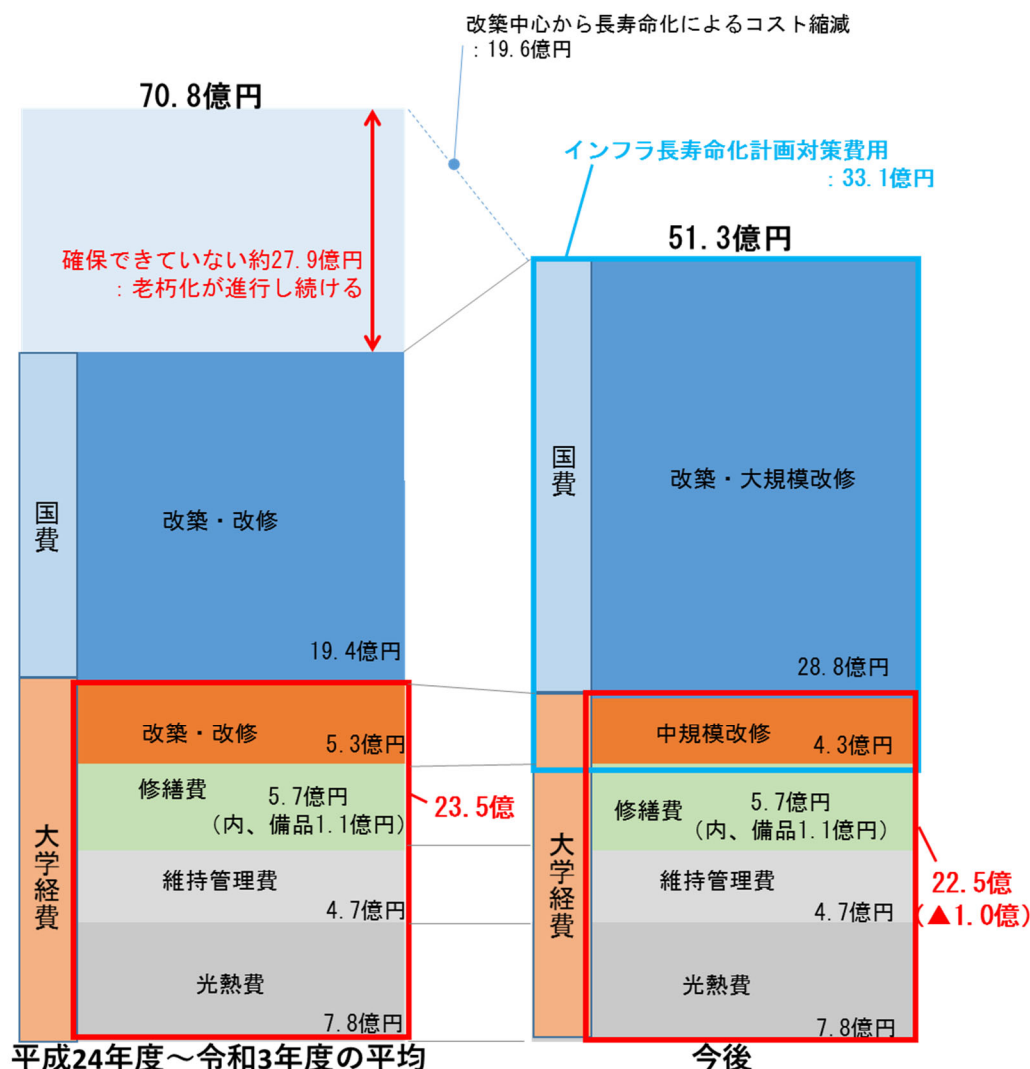
経年	60年以上	55～59年	50～54年	45～49年	40～44年	35～39年	30～34年	25～29年	20～24年	15～19年	10～14年	5～9年	0～4年	合計
健全（建築後25年未満）	0	0	0	0	0	0	0	0	39,377	47,551	23,454	41,883	78,523	230,788
改修済（改修後25年未満）	21,150	54,443	27,493	9,579	67,491	12,369	1,539	579	0	0	0	0	0	194,643
未改修	3,438	1,054	3,743	634	28,174	19,968	14,120	33,346						104,477
改修済（改修後25年以上）	※35,826	20,726	1,128	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	57,680
性能維持改修	0	0	0	0	769	0	0	4,033	5,126	0	0	0	0	9,928
部分改修済	0	1,629	7,398	3,067	14,419	0	2,598	0	0	0	0	0	0	29,111
合計	60,414	77,852	39,762	13,280	110,853	32,337	18,257	37,958	44,503	47,551	23,454	41,883	78,523	626,627
割合	9.6%	12.4%	6.3%	2.1%	17.7%	5.2%	2.9%	6.1%	7.1%	7.6%	3.7%	6.7%	12.5%	100.0%
棟数	17	47	38	19	61	19	16	22	17	55	20	20	11	362
棟数（要改修）	15	24	27	13	47	16	15	21	0	0	0	0	0	178

※うち35,033㎡は医学部本館で共用停止中のため、インフラ長寿命化の費用は見込んでいない。

要改修面積 196,070㎡

◆長寿命化によるコストの縮減

従来の改築中心の50年使用と今後の長寿命化の80年使用で、必要なコストの試算を行った。50年では70.8億円/年（確保できたていたのは42.9億円/年）必要であったところ、80年では51.3億円/年となり、19.6億円/年の縮減が可能となる。



◆優先順位付と年次計画

◇優先順位は、新築・改修後の経過年数を基本とするが、次の項目を評価して総合的に判断する。

- 新築・改修後の経過年数
- 施設の部位別（屋上防水、外壁、空調等）の劣化度
- 建物用途による重要度
- 持続可能性が期待できる教育研究活動を行うため必要性の高い建物
- 重大な事故歴のある施設

◇年次計画は、今後の必要コストに対し対象施設の改修等の優先順位を基に実施時期を前後に分散させることで予算の平準化を行う。

以上。